

大阪インターナショナルチャーチ

2008年 3月9日

ダニエル エルリック牧師

シリーズ : 始まり #8

題 : アダムとエバ

聖書の箇所 : 創世記 2:15-25

I. 初めに

おはようございます！ヨハネによる福音書 1:17 は、こう語っています。「律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。」この御言葉は、モーセとイエスとの重要な違いを述べています。でも、今朝、私が皆さんにお伝えしたい要点は、聖書では、モーセが律法の著者であると語っていることです。それはユダヤ人が「五書」と呼んでいるもので旧約聖書の初めの五巻を指しています。100年前、多くの学者たちは、モーセを著者として認めていませんでした。そして、こう思った人さえありました。モーセの時代、一般的に人々は、字の読み書きができなかったと。けれども、ここ 50 年ほどの間に、考古学者は、モーセの時代の 1000 年ほど前、中東の人々は、読み書きをすることができたということ、発見したのです。たとえば、この写真は、粘土版ですが、シュメール語の文字で埋め尽くされています。その時期は、紀元前 2600 年ごろであり、それはモーセの時代の何百年も前に書かれたと推定されています。



皆さんは、モーセが「五書」の著者であることに、いまだに反対の主張をする書籍に出会うかもしれません。けれども、モーセが著者であるとする証拠は、聖書の内外においても、とても強固だと思われまます。また同時に、モーセは、参考にするような古い書物も、手に入れることができたということも確かです。そして、モーセは、時々それらの古い書物から、分割された部分をまとめたようです。とにかく、聖霊に導かれたモーセは、その言葉を決定的な形にし、書きつけたという人でした。ですから、モーセは、大切な著者と言えますね。(絵画:「モーセと十戒」1808年 フィリップ・デ・シャンパーニョ)



創世記を勉強するに当たり、私たちは、次のことを覚えておく役に立つでしょう。創世記は、歴史であるにもかかわらず、モーセは、それを現代の歴史家とはかなり違う目的を持って書いているということです。モーセはイスラエルの人々に、神について、また、人間がどのように生きるべきかについて教えるために書いているのです。これらの目的から、モーセは時に、歴史に教えと解釈を差し入れています。また、繰り返しや詩的な美しさ、話の中に隠喩や比喩、そしてユーモアさえも用いて、文語的な工夫がなされるようにしています。これらの文語的な工夫は、教えの主な要点を、分かりやすく理解し、覚えさせてくれる助けとなっているのです。さあ、創世記 2:15-25 まで、読んでいきましょう。

II. 聖書朗読 : 創世記 2:15-25 (新共同訳)

- (15) 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。
- (16) 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。(17) ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」(18) 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」(19) 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。(20) 人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。(21) 主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。(22) そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、(23) 人は言った。「ついに、これ

こそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イチャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」(24) こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。(25) 人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

III. 教え

創世記 2:15 は、こう言います。「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。」その時、アダムは、一人でエデンに住んでいました。その時、アダムは、もうすでに働いていたのです。でも、この絵画では、アダムは、まるで、ゆっくりとくつろいでいるように見えます。本当の所、私たちは、休むのが好きなようですが、人類は、何もすることがないというのは、幸せではないのです。私たちは、何か意味のある仕事が必要で、その仕事をうまくやり終えた時の完成した気持ちを楽しみます。もちろん、その仕事によって、挫折や失望も時々ありますが、でも、それは、この失われた世に住んでいることから来ているのです。そこでの人間関係は難しく、仕事はいつもうまく成功するわけではありません。しかし、働くこと自体は、良いことです。



先週の学びから、私たちは、エデンの園に特別な2本の木があることを記憶しています。それは、命の木と、善悪の知識の木。これらの2本の木は、選択を象徴し、神が人間に自由意志の尺度を与えられていることを明らかにするものです。さて、創世記 2:16-17 で、神はアダムに命令されました。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」と。



命令とは、自由についての命令。つまり、庭にあるどの木からでも食べてもよいという自由です。しかし、1つだけ例外がありました。「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。」ということ。そして、もし、その命令に従わなければ、どうなるかという結果も言われています。

「食べると必ず死んでしまう。」ということでした。主は、一つの従うべき規則の他は、アダムに広範囲にわたる自由を与えられていたのです。ですからアダムは、従うことで、神を誉め称え、神への信頼を明らかに表すこともできました。でも一方、不信と疑いを選び、不従順によって、自分の人生を破壊することもできたのです。来週も続けてメッセージを聞いてください。アダムが、どうするか、わかりますよ。

2, 3週間前の聖書の学び、創世記 1:31 に戻りますが、こうありました。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。」第六の最後の日、すべてのものは極めて良かったと書かれています。でも、今日の聖書の箇所では、いまだに第六の日にいるのです。そして創世記 2:18 で、主は、言われます。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」時々、主は、特定の男性や女性に、独身でいる人生を求められます。そしてもし、あなたが、そのうちの一人であれば、その主の求めに対して主を賛美してください。しかし、一般的な規則では、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」となっています。私たちは、一人だと、あまりうまくやっっていけないのです。助ける者が必要です。ほとんどの人は、もし適切な人が見つければ、多分結婚されるでしょう。

でも、それがハリウッド映画のようなロマンスでなければならぬとしたら、実は、そんな見かけ倒しの一瞬のロマンスは、長く続かないことがよくあります。

皆さんご存知のように、結婚について多くの冗談話があります。これは、私が最近聞いたものですが、教会学校の先生が、子供たちと結婚について話していました。先生は聞きました。「さて、聖書では、結婚についてなんとやっているかな？」すると一人の少年が答えました。「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは、自分たちが何をしているのか、わからないのです。」と。結婚生活には、チャレンジすることがいっぱいあります。ですから、私たちは、この苦しみを笑えるようにしなければなりません。けれども、私自身の意見として、もし、あなたが良い女性または良い男性を見つけて、その人が、イエスを信じ、あなたと共に幸せな結婚を築いていこうと献身する人であれば、あなたはその結婚を真剣に考えるべきでしょう。神に対する愛とお互いに献げる愛で築かれた結婚は、20年後を見ると、ハリウッド型の瞬間に築かれた結婚より、更

にもっと幸せと言えるからです。もちろん、自分の好きでもない人と結婚したくありませんが。ですから、主の導きをしっかり祈ることが必要でしょう。でも、基本的に、クリスチャンの友情関係は、結婚の良い土台となっています。「人が独りでいるのは良くない。」

私たちに、助けが必要です。神はアダムをご覧になり、助けが必要であると思われ、それを知らされました。(創世記 2:18)「彼に合う助ける者を造ろう。」ある人は、その言葉「助ける者」を見て、早合点してしまいます。男性が主人であり、女性は補佐役なんだと。けれども、それは大きな間違い。詩編 118:7 で言われていることに目を留めてください。「主はわたしの味方、助けとなって／わたしを憎む者らを支配させてくださる。」この御言葉で、また他の聖書の箇所でも言われていることですが、神は、私たちの助けと呼ばれているのです。でも、もちろん神は私たちの補佐役ではありませんね。すなわち、神はあらゆる物の主であられます。聖書では、助け人というのは、皆さんが「助けて、助けて！」と大声で叫ばれるとき、救いに来てくださるお方を指しています。私たちは、普段、そのことを認めたくないとしても、人間は、多くの助けが必要なのです。それで、神は、私たちにふさわしい助ける者を用意してくださるのです。

けれども、女性を創られる前、神は動物たちをアダムの所へ持って来られ、アダムに、その動物たちの名前をつけるように言われました。これは、少なくとも2つの目的をかなえるためでした。一つは、人間の権威を動物の上に置くことです。なぜなら、古代においては、名付けるということに、権威を主張するという意味があったからです。創世記 1:28 において、神は、男性と女性に、生き物を支配するよう伝えられています。すなわち、その支配は、アダムが動物の名前を付けた時に固められたのです。二つ目は、動物に名前をつけるため、アダムは、それぞれの動物を良く知らなければなりません。適した名前をつけるためです。ある人々は、こう思われます。名付けるぐらい、ほんの数時間で、できるだろうと。でも、個人的に言って、それには、とても長い時間がかかったに違いないと思われます。とにかく、アダムは、動物の名前を付けましたが、アダムを助けてくれる適当なものは、まだ見つかりませんでした。



創世記 2:21-22 に、こうあります。「主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、」ほとんどの英語の訳では、「あばら骨の一つ」となっています。けれども、元の言葉も、あばら骨のわずかな部分、又は人の脇腹の一部分とされています。ある解説者は、これを文字通りにとらえ、また他の解説者は、象徴的な表現だと捉えています。私としては、2番目の見方に賛成しますが、どちらにしても、これらの言葉には、深い象徴的な意味を含んでいます。

一般的な引用文ですが、このように言われています。「女性は、男性に勝るために彼の頭から作られたのでもないし、踏みつけられるために、彼の足から作られたのでもありません。でも、彼と平等でいるため、彼の脇腹から作られて、彼にとって愛しい人であるよう彼の心のそばにいます。」人が、深い眠りにいる間、全く無力な状態のとき、主なる神が来られて、人の一部と取られて、その人を助ける者を形作られたのです。数年前、ある本が出版され、流行ったのですが、そこにこうあります。



「男性は火星から、女性は金星からやって来たんだよ。」と。その本は、男性と女性の違いを強調しています。けれども聖書は、男性と女性の共通している所について、もっと強調しているのです。女性は、男性とは違っています。でも女性は、男性の一部から作られていますので、男性とは同じ素材から成っていると言えます。

男性と女性は、同じ物質であり、どちらか一人が欠けてしまうと不完全なものとなります。パウロは、コリントの信徒への手紙一 11:11-12 でこう語ります。「いずれにせよ、主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。それは女が男から出たように、男も女から生まれ、また、すべてのものが神から出ているからです。」男性と女性は、お互いに必要であり、どちらも一人では完全とは言え

ないのです。二人は、家庭や社会にあって、異なる役割を持っているのかもしれませんが。けれども、男性と女性は、価値においては等しく、お互いが相手に頼りあっているのです。

ある聖書の教師たちは、妻の夫に対する務めは服従することであり、夫の勤めは妻を愛することであるというエフェソの信徒への手紙 5 章をとっても強調しています。その教えは大切ですが、私たちは、それを誤解することのないように、教えに含まれるもっと大きい背景を覚えておかなければなりません。パウロは、エフェソの信徒への手紙 5:21 で、書いています。「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい。」そして、ヨハネの手紙一 3:11 では、次の御言葉を思い出させてくれます。「なぜなら、互いに愛し合うこと、これがあなたがたの初めから聞いている教えだからです。」この全体の文脈から、聖書は、相互に愛し合い相互に服従するように教えてくれているのです。

創世記 2:23 で、男性は自分の助け人としての女性を受け入れています。「人は言った、『ついに、これこそわたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャ）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。』」そして、創世記 2:24 で、モーセはある解説を付け加えています。「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」この短い御言葉で、幸せな結婚の 3 つの鍵となるものを見出せます。「離れること」、「結ばれること」、「一つになること」の 3 つがあります。離れることは、前の生活にはっきりと別れを告げるということについて話しています。男性は、自分の父と母から離れます。男性は自分の両親を誉め敬うべきですが、かれらから自立します。それから、男性は、結婚という契約の約束により自分の妻と結ばれます。最後に一つになるというプロセスがあります。つまり、男性と彼の妻は、何年もの時をかけて、一つになるようにお互いが親密になっていきます。それは、もはや二人の別々の者ではないのです。時々、この過程は、こう呼ばれます。「去ること、くつつくこと、作り上げること」という風に。まず、父と母から離れます。次に自分の妻とくつつきます。そして、二人の者が一つとなるように作り上げるのです。

結婚した夫婦が苦勞するのは、たいてい、これらの段階の一つが無視されているのです。日本では、男性が自分の父や母からちゃんと離れていないことで、結婚した夫婦がよく悩むようです。アメリカでは、多くの男性が、結婚式を飛ばしてただ恋人と一緒に住むか、又は結婚の誓いをして、そのことをあまり真剣に捉えていないかのどちらかだと思われます。そしてまた、世界中では、多くの夫や妻が、自分たちの人生を共に生き、一つになるよう共に成長するのに失敗する夫婦がたくさんいます。皆さんは、御自分の結婚生活に苦勞されていますか。聖書が何て言っているか、聞いてください。男性は、自分の父と母から離れ、自分の妻と一つになるのです。男性と女性は、共に忠実に生き、一つとなるのです。もし、幸せな結婚を望まれるなら、自分達の人生が一つになるように互いに近寄る必要があります。これには時間がかかりますし、ちょっと大変な過程になるかもしれません。なぜなら、御自分の個性のある部分を抑えてしまうことも伴っているからです。でも、そのことも又、すばらしい報いのある祝福された過程と言えます。けれども、何よりもまず、幸せな結婚の鍵は、その結婚に神をお招きし夫婦と一緒に神を求めていくことなのです。



数年前の事です、掲示板の広告で、人々が神の元に帰り、教会の交わりに戻ってくるよう企画されたキャンペーンがありました。一つの啓示版は、こう伝えてあります。「『最愛なる結婚式に、これからの結婚生活にも、日々、私を招いてください』神より」神は、きっとクリスチャンの結婚を心から喜ばれていると思います。でも、クリスチャンの式は、皆さんが、結婚生活に神を招かれぬ限り、自分たちの幸せを満たすものは何もありません。もし、夫と妻が、自分たちの人生で、主を第一の優先順位として、主に導いていただき歩んでいくな、その夫婦は、お互いが喜びに包まれた人生を歩んでいけることも、すぐ分かっていくことでしょう。

創世記 2:25 に「人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。」と書かれています。アダムとエバはお互いに何も隠すことはありませんでした。つまり、二人とも、ありのままの姿を見て、お互いに受け入れていたのです。それに又、何一つ恐れることもなく恥ずかしがることもありませんでした。なぜなら、彼らには、罪がなかったからです。すなわち、二人は、神の前でもお互いの前でも、無罪だったのです。創世記 1:31 を振り返ってみると、6 日目の最後に、神は御自分がお造りになっ



たすべてのものをご覧になって、極めて良いと思われたと書かれています。

このことから、セックスも含めて、結婚における男性と女性の関係が考えられます。ある説教者は、セックスを火と比べて説明しています。火というのは、それが正しい所、たとえば、暖炉とか料理用レンジなどの上に置かれれば、それはすばらしい物、つまり私たちを暖かくし、必要な多くの物を満たしてくれる物となります。けれども、火が、間違ったところに置かれれば、どうなりますか。家を、更には町まで破壊してしまうこともあります。セックスもそのようなもの。もし、それが正しい行いならば、結婚生活の暖炉であり、神からの素晴らしい贈り物となります。でも間違った行いなら、それは家も社会さえ滅ぼしてしまうものとなるのです。



IV. まとめ

アダムとエバは、裸でしたが恥ずかしとも思いませんでした。私たちはどうですか。暑い夏の日でさえ、ほとんどの人は、服を着ないで外へ行くことはありません。なぜでしょう？それは、裸であることが恥ずかしいし、みっともないからです。これらの感じ方は、ただ私たちの体を覆うというよりも、もっと深い問題が含まれているのです。皆さん、問題は、私たちが皆、隠そうとするものを持っているということです。私たちは、みんな罪を犯しているのであり、服というのは、罪を覆おうとする私たちの強い願望の象徴なのです。けれども、ルカによる福音書 12:2 の最後の部分で、このように警告しています。「覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。」

自分の罪を隠そうとしても、うまくいきません。それは、ある日、隠されている罪が、現れてくるからです。けれども、キリストの十字架を通して、神は、裸という事、つまり罪や恥という問題への実際の解決を提供してくださっているのです。ヨハネの手紙一 1:9 で、神は約束してくださっています。「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。」神の恵みによって、罪の告白と悔い改めの過程を通して、私たちは、赦され、修復され、清められ新しくされるのです。



さあ、皆さん、神の元へ行き、自分の罪を告白し赦しを請いましょう。神の所へ行き、自分の結婚や家族を癒してくださいよう願いましょう。皆さん、神の元へ行き、神が私たちの人生で、家で、社会で、新しい、そして素晴らしい働きをなしてくださいよう願いましょう。さあ、祈りましょう。

V. 最後の祈り